

1 部局名

経済経営学部

2 学長指定課題

学修ポートフォリオ設計による学修成果の可視化

3 事業名

学修ポートフォリオ設計による学修成果の可視化

4 事業実施代表者名

経済経営学部 教授 野口 昌良

5 事業の概要

経営学系では、2015年度および2016年度に渡って、特定科目（経済史・思想史入門および会計制度論）においてルーブリック評価を試験的に導入したが、部局全体の普及には至っていない。科目の性質やクラスサイズによってルーブリック評価に適さない場合があるからである。他方、経営学系において修得できる「分野固有の知識・能力」の学修到達度を評価し、各学生にフィードバックする必要がある。これによって学生は、過去の学修成果を可視化し、次の段階で取り組むべき課題を自ら発見し、自律的に学修プロセスを修正・再設計できるからである。

本事業の目的は、ルーブリック評価の適否にかかわらず、経営学系が提供する専門教育科目に一定程度共通に適用できる、学修到達度評価のフィードバック・システム構築を模索することにある。

2017年度は、経営学系の「分野固有の知識・能力」を判定するのに対応した特定の問題ないし課題を、経営学系が提供する正規専門教育科目において設定し、当該特定問題ないし課題のスコアをスケール化する。この到達度評価を学生毎に集計して「学修ポートフォリオ」のかたちに編成し、フィードバックする。2019年度においては、学生が自らの学修過程を自己評価できる「ステューデント・ポートフォリオ」の構築し、学修ポートフォリオと統合する。ステューデント・ポートフォリオのフィードバックにより、学生は、経営学系での教育課程を含む、総合的な範囲の学修過程を自省的に評価することができると考えられる。

6 取組成果

3年間の事業期間において実施した具体的な取組としては、概ね次の3点に集約できる。

① 学修達成度評価システムの構築

初年度である2017年度において、経営学系が提供する専門教育科目につき、「経済学・経営学分野固有の知識・能力」に関する学生の学修達成度を判定し、当該情報を学生にフィードバックする基幹システム（以下、学修達成度評価システムとする）を設計・構築し、試験運用を実施した。9つの分野（ミクロ経済学分野および戦略論分野等）につき、(A)成績ベース・レーダーチャート、(B)単位ベース・レーダーチャートおよび(C)平均値ベース・レーダーチャートの3タイプを用意した。また、上記3タイプのレーダーチャートとは別に、経済経営学部で提示する専門教育科目の履修モデルに対する適合度判定用レーダーチャートを2タイプ（経済学コース用と経営学コース用）用意した。

② ジェネリック・スキル達成度評価システムの開発

2018年度および2019年度を通じて経済経営学部が提供する専門教育科目を通じて獲得できる汎用的能力（以下、ジェネリック・スキルとする）について、その達成度を判定できるシステムの開発に取り組んだ。まず、能力のカテゴリライゼーションとして、(A) 課題解決能力、(B) 数理的解析能力および(C) 論理的思考力・記述力を指定した。これらの能力につき、次頁に記載するスケールに基づき、「試験的に」ジェネリック・スキルの測定に取り組んだ。評価にあたっては、(1) 学生自身による自己評価と(2) 教員による評価の双方を実施し、その整合度を確認することによって、将来的な測定方法の精緻化に努めた。

③ アンケート調査の実施

2018年度の履修登録の以後、経済経営学部所属学生に対してアンケート調査を実施した。その結果、履修登録に際しての有用度について概ね好意的なレスポンスを得た。3タイプのレーダーチャートのうち、もっとも高評価を得たのが平均値ベース・レーダーチャートであった。自身の相対位置に関する情報に対して学生は積極的に反応する傾向がうかがえた。

改良した学修達成度情報によって、各学生がその成果を可視化し、学修プロセスを自律的に修正・再設計できているかどうかを再度確認するため、一部学生に対してインタビュー調査を実施した。学修達成度のフィードバックは、学生の能動的学修とその再設計を促す仕組みとして役立つばかりでなく、経済経営学部における学部教育の質保証に関するエビデンスとしても機能することが期待される。

評価ポイント	名称	内容	評価主体	評価のグレード			
				まったく理解していない水準	改善途上にある水準	平均的な水準	期待された水準あるいはそれ以上の水準
				ポイント			
				pt 0	pt 1	pt 2	pt 3
評価ポイント1	課題解決能力	実社会での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる能力（必要な情報の理解・選択・処理、因果関係の検討、課題発見、計画立案、実行、評価・改善等を含む）	教員	課題の構造を理解できていない。	ある程度の理解は有するようみえるが、課題の要求にできていない。	課題の解決に必要な情報を一定程度把握している。	課題の解決に必要な情報を十分かつ正確に把握している。
			学生	探索的なレポート課題を提出しなかった。	探索的なレポート課題は提出したが、その主旨については理解できなかった。	探索的なレポート課題を提出するにあたり、その主旨に必要情報を調べた。	探索的なレポート課題を提出するにあたって必要な情報を調べると同時に、その情報の解釈にあたって必要な分析手法についても調べた。
評価ポイント2	数理的解析能力	与えられた課題に対して、一定時間内に、数理的な解析を実践できる能力（計算機の利用、数理モデルの応用を含む）	教員	必要な計算・演算方法を理解していない。	一部の計算・演算を実施しているが、ほとんど正解には至らない。	必要な計算・演算を部分的には実施している。	問題の解答に必要なかつ正確な計算力を有している。
			学生	定期試験での計算・演算問題が解けなかった（白紙解答）。	定期試験での計算・演算問題について解答はしたが、正答率は20%以下だと思う。	定期試験での計算・演算問題について解答はしたが、正答率は50%程度だと思う。	定期試験での計算・演算問題について解答し、しかも正答率は80%以上だと思う。
評価ポイント3	論理的思考力・記述力	与えられた課題に対して、一定時間内に、的確な解答を文章により論理的に記述する能力（適切な概念・必要な情報の利用、体系的な論理構造の展開を含む）	教員	必要な概念の理解とその説明ができない。	一部の説明はされているが、課題の主旨に答えていない。	必要な説明はされているが、体系だっていない。	必要な説明が十分ない体系をもってなされている。
			学生	定期試験での記述問題が解けなかった（白紙解答）。	定期試験での記述問題について解答はしたが、正答率は20%以下だと思う。	定期試験での記述問題について解答はしたが、正答率は50%程度だと思う。	定期試験での記述問題について解答し、しかも正答率は80%以上だと思う。